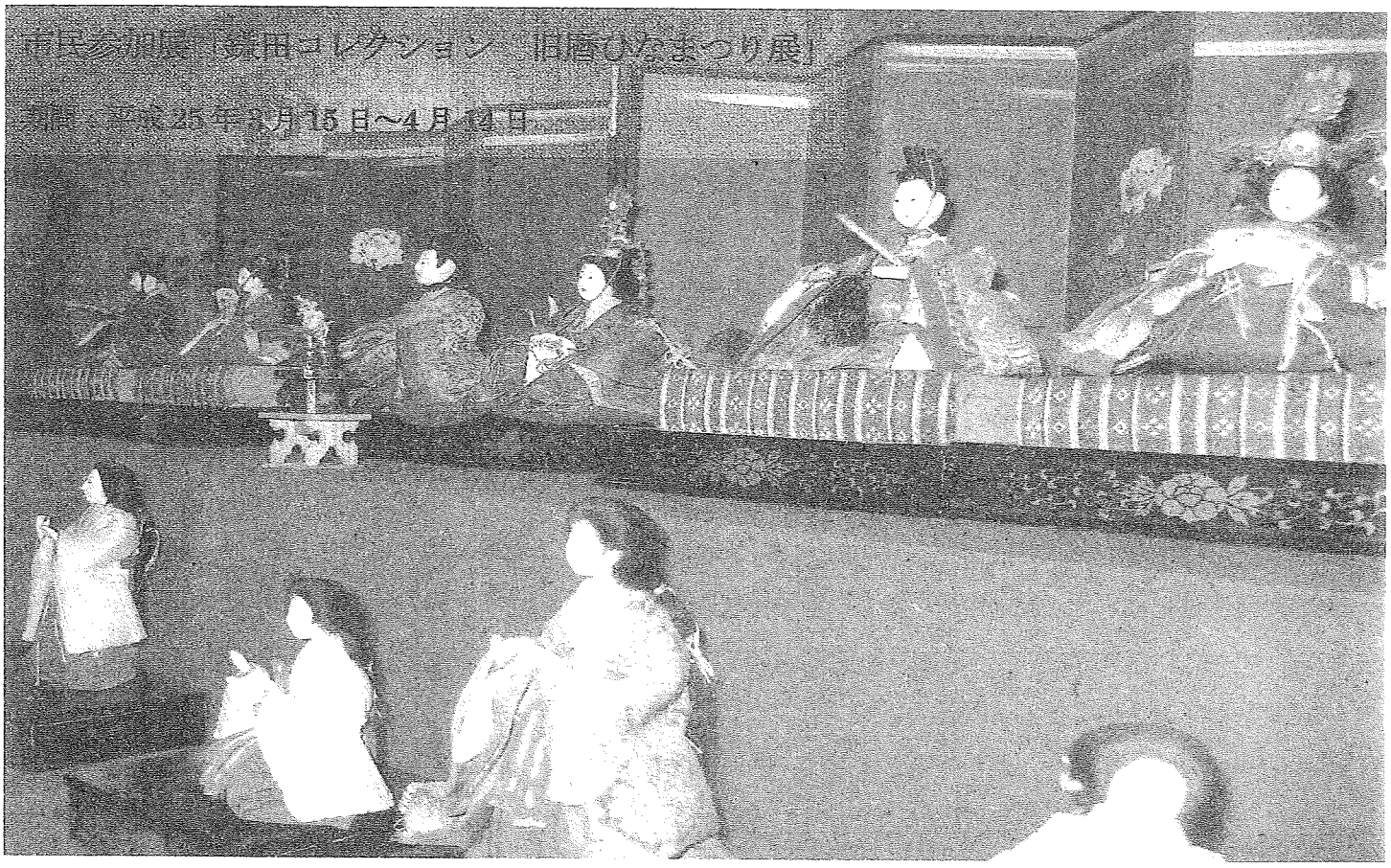
れきみん
となん歴民だより vol.34

Morioka tonan history and folklore museum

平成25年3月29日発行

発行　盛岡市都南歴史民俗資料館　盛岡市湯沢 1-1-38　Tel/Fax 019-638-7228



是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

・当館指導員　安田　隼人
「南部伯爵家と華族の人脈」

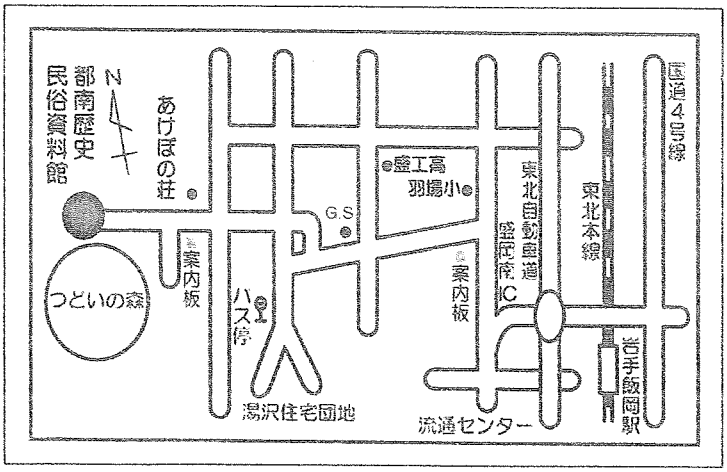
・玉山歴史民俗資料館所蔵資料整理について

・資料は語る㉞

・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介㉞

・となんの昔ばなし㉞

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間　午前9時から
午後4時まで

入館料　無　料

休館日　月曜日
（休日に当たるときは、直近の平日）
年末年始

南部伯爵家と華族の人脈

盛岡市都南歴史民俗資料館　指導員　安田　隼人

戊辰戦争後、明治維新を迎えた盛岡藩が苦境に立たされたことは周知の通りである。朝敵の汚名を着せられた盛岡藩は、その打開策として東次郎の提案を受け入れ南部利剛の娘郁子の華頂宮博経親王への輿入れを模索し成功し、これが功を奏し利恭は盛岡藩知事に任命されることになる。

さて、藩知事に任命された諸大名は、その大名という地位を剥奪され華族という新たな地位に組みされることになった。華族制度が制定されたのは、明治2（1869）年とされ、その制定には岩倉具視・木戸孝允・伊藤博文ら関与していた。しかし、どのような経緯で華族という名称に決定したかは明らかではない。

華族研究は、最近尚友倶楽部華族史料研究会を始め多くの研究者の手によって進展してきているが、華華族・南部伯爵家についての研究はほとんど進んではいない。南部伯爵家の歴史は、いまのところ種々の写真集などの記録からでしかその一部を垣間見ることができないのが実情である。そこから見えるのは、華族という同族集団を中心に各界の主要な人物との幅広い人脈である。それは、婚姻や南部家当主が務めた役職などによって形成されたものである。利恭の子息であり「南部中尉」として有名な利詳は大正天皇のご学友であり、東条英教（元南部藩士・英機の父）や長岡護全（長岡子爵家子息・学習院幼年科同級・親族細川侯爵家三男・日露戦争に共に従軍し戦死）を始め、原敬など政界の人間とも繋がりを有していた。弟利淳は、兄亡き後、南部伯爵家当主を継ぐ。利淳は、多種多芸であり南部鋳金研究所創設に尽力し、その所長に松橋宗明を招いている。そのほか、油絵が趣味の利淳はアトリエを東京の自宅に作り、五味清吉にも師事している。このように文芸方面にもその人脈を広げていた。また、その養嫡子利英（幼名一条實英・五摂家）は企画院総裁秘書官を及び貴族院議員（所属派閥「研究会」）を務め、政界を中心に幅広い人脈の渦中にいたのである。利英自身の本家でもある一条家は五摂家でのひとつであり、伏見宮家との婚姻関係がある。五摂家は、明治17年（1884）に制定された華族令（華族令はその後大正11年、昭和4年に2度の改正が行われる）によれば、五摂家は唯一皇族との婚姻を許された華族である。このように華族という同族集団のネットワークや特権的地位によって上流階級に人脈を広げている。

しかしながら、それだけではなく旧藩社会との関わりも南部伯爵家は重要視していたようだ。利恭を始め、南部伯爵家の当主はことあるごとに来盛している。米が不作と聞けばその状況を地元に尋ね、明治29年の三陸大津波によって旧藩が甚大な被害を受けたと知ればその援助策を思案している。

また、旧藩士族も依然として南部伯爵家を忠孝を尽くす主と認識していた。当主が来盛すれば、その歓迎をし、帰京するとなるとその見送りをするなどしており、南部伯爵家の家職を担当する者は必ず旧

藩士族出身者であった。このように歴代当主は明治維新以後も旧藩社会との絆を形成していた。戦後、多くの皇族・華族はその特権的地位を喪失し「斜陽族」となった者も少なくない。

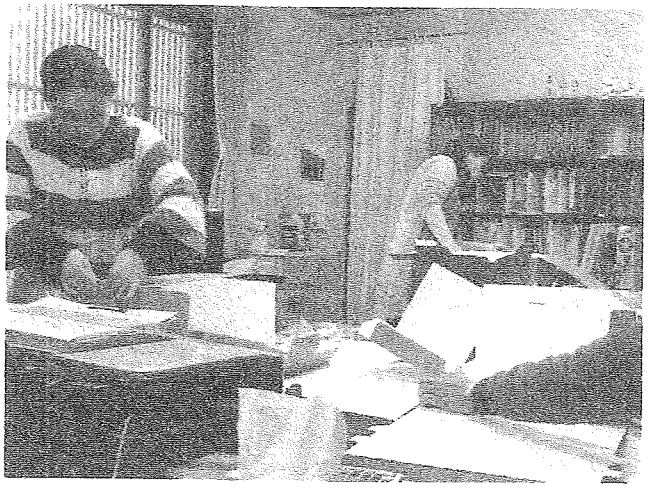
しかし、南部伯爵家は今日も盛岡においてはその地位を保っているといえよう。何かと来盛すれば市や市民から何かしらの歓待があるのもその実といえるだろう。

玉山歴史民俗資料館収蔵資料整理について

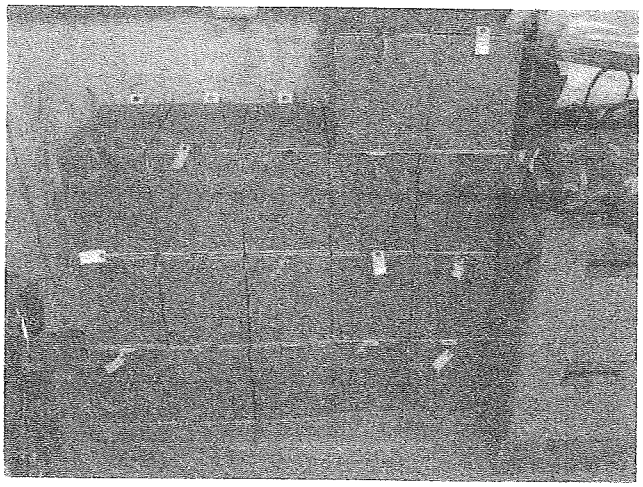
玉山歴史民俗資料館は巻堀小学校の郷土資料室を前身とし、その後昭和52年に現在の建物なりました。平成24年度6月より玉山歴史の収蔵する資料の一部を当館で整理することになり、平成25年3月まで行っていました。整理したものの多くは古文書であり、まず亀井家文書から整理が始まりました。亀井家文書のうち整理されたものは1692点にのぼります。

亀井家は来光院の別当を務める家柄であり、江戸時代には自光坊配下の年行事を務めていました。また明治以降、亀井家は巻堀村（現盛岡市玉山区字巻堀）の村長をはじめとして村の重役を務めることになります。

さて、整理された資料の中には、来光院の資料をはじめとして青森第五連隊へ入隊した家人から手紙や満州から家人への手紙、そのほか第二次世界大戦時の軍事郵便などがありました。軍事郵便の中には藤田嗣治（レオナール・フジタ）や中井汲泉（先人記念館顕彰者）など有名な画家が描いたものもあり、当時の玉山区が置かれた状況やそのほか多くの歴史を知る貴重な資料がありました。



整理作業風景



整理された資料

平成２５年度「市民参加展」の予定

当館では、普段なかなか見ることのできない市民の方が収集された資料等を「市民参加展」として公開し、郷土の歴史や文化、風習等に対する理解を広める機会としています。

平成２５年度も、次のような展示を計画しています。ご来場をお待ちしております。

・「郷土画家が描いた絵葉書展」

期間：４月 27 日（土）～７月７日（日）

内容：中井汲泉、真壁次郎らが描いた郷土に関わる絵葉書等、約 200 点展示します。

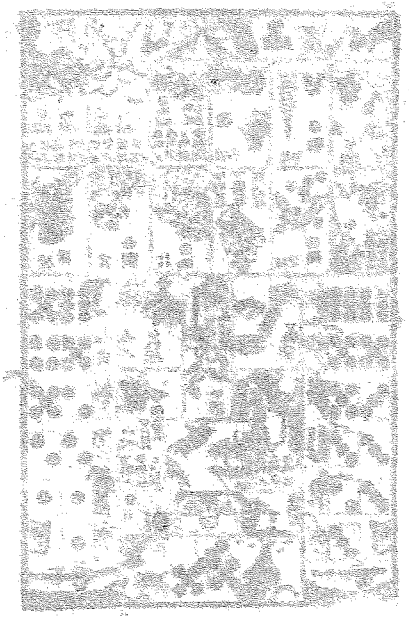
【「ちゃぐちゃぐ馬コ」絵：中井汲泉】

・「珍品・稀書でたどる盛岡展」（仮テーマ）

期間：９月 14 日（土）～12 月１日（日）

内容：原敬の手紙、宮澤賢治の書、鈴木彦次郎直筆原稿等々、普段はめったに見られない資料の展示を予定しています。

盛岡市所在書籍・盛岡文化紹介



盛岡暦　天保十三年盛岡暦

絵暦は江戸時代に文字の読めない民衆のために考案されたもので、県北の田山地方では田山暦、盛岡城下では盛岡暦の二種類の絵暦が作られていました。

盛岡暦は独自の絵文字の図柄を木版に彫り、一枚刷りにしたものです。この天保十三年暦は現存する最古の盛岡暦で、毎年刊行される盛岡暦の基本型となりました。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008.

『義経のかたみ』　となんの昔ばなし三十四

手代森に屋号が新山（現戸主藤原克巳氏・原文ママ）という家がある。屋敷内に御新山という祠があって八月十五日を祭日として地域民一同祀っている。この祠はもと遠野守大権現と称していた。

みちのくに最高の栄華をほこった平泉の藤原氏が没落した若き英雄源九郎義経は平泉を脱出し，頼朝の目を逃れここ手代森まで旅を続けてきた。この時義経は手下数人とともに越後獅子姿に身を装っていた。

新山家では手厚くこの一行をもてなしたが、頼朝の義経追討はここまで迫り探索の手はのびていた。新山一統は堅く義経のことを秘してそれをかくまっていた。

こうして、義経一行は危ういところをのがれたのであるが、新山家を辞すとき、「この厚遇まことにかたじけない。これは記念の品であり、私の片身でもある」といって、一幅の掛物と越後獅子の「獅子頭」を下しおかれ，義経主従は北へと旅立っていった。

その掛物には鎧姿の義経が馬にまたがり，一人の供をつれている絵がかかれていた。新山家では代々語り伝え、家宝として、いまに伝えている。

獅子頭は，屋敷内の土中深く埋め荒神であるからそれをしずめるために、その上に大石を据えた。傍らには祠をたてて「殿守大権現」と命名した。しかし、そこに掲げる額には「遠野守大権現」と記した。実は殿まもり（殿さまを守った意）なのであるが、義経をかくまうための知恵だったのである。

これは，代々新山家に伝えられている義経ゆかりの物語である。